

愛知北米移民の研究（Ⅰ）

— 海部・津島地域を中心として —

筒 井 正

1. はじめに

海外移民に関する研究テーマは多様性に富み、同時に研究材料は豊富である。移民研究は、これまで歴史学・地理学・社会学・人類学・言語学など多岐にわたる分野の研究者が独自の立場で個別的におこなってきた^①。

愛知県における移民研究は、ほとんど進んでいない。僅かに北米愛知県人会が1920年に編纂した『北米愛知県人誌』があげられる。同書は、序文において「（北米愛知県人の）活動発展の現状を北米愛知県人会より故国愛知県の同胞に紹介する報告書」と位置づけ、愛知県出身者の渡米後の歩みや愛知県人会の活動等について掲載している。しかし、出移民の要因やその実態に関する記述はなく、また、1920年以降の愛知県出身者の歩みに関する報告書は皆無に等しく、愛知の移民研究はその緒についたばかりといえる^②。

本稿においては、北米移民を多く送り出した海部・津島地域を中心として、明治中期から末期にかけて急増した北米移民の契機とその実態、出移民の要因について論じてみたい。

2. 北米移民の契機とその実態

（1）山田芳男の漂流と移民の始まり

木曽川下流域で、海部郡西部に位置する八開村丸島地内に、通称「コロンブスの碑」と呼ばれる石碑がある。この石碑は1923年、丸島出身の山田芳男を北米移民の先駆者・功労者としてその功績を讃えるため、北米愛知県人会が建立したも

のである。

碑文によれば、山田芳男（本名山田八百蔵）は1856年丸島で生まれ、1881年ラッコ捕獲船に乗り操業中北方海域で遭難し、米国の捕鯨船に救助されてサンフランシスコに上陸した。同地で富豪のヘンドルと出会い、同氏の経営するサクラメント平原ナトマのブドウ園に就労した。山田はヘンドルより移民勧誘の依頼を受け、1889年に帰郷し、郷里の丸島を中心に移民の勧誘を行い、同郷の者6名を含む11名が同年末渡米した。これが愛知県出身者による北米への集団移民の始まりとされている。

カリフォルニア州では、ゴールドラッシュ以降、州都サクラメントやサンフランシスコなどで人口が急増し、農産物の需要が増大した。それまで、農業労働力の主要な担い手であった中国人は、白人社会にうまくとけ込めず、1882年の中国人排斥法により労働市場から閉め出されてしまった。山田がサクラメント平原で働き始めた1880年代は、日本人移民も少なく「平時櫻府（サクラメント）に在る者僅かに二～三〇人に過ぎず」といった状況で、アメリカ西部の労働市場は深刻な労働力不足となっていた¹³⁾。

当時、海部・津島地方における一般労働の賃金は極めて低く、農業労働は日給にして7～8銭、重労働であるクネタ（高畝）作りは12～13銭であった。これに対して、山田芳男に引率されて北米に渡った先発隊が就労したナトマのブドウ園における日給は、1ドル25セント（当時の為替レートに換算して1円67銭）で、先発隊が渡った翌1890年の2～3月ごろに数名の者から若干の送金があり、八開村及びその近隣の人々の間に北米への出稼ぎが有望であることが知れわたり、1890年代後半になると、数多くの若者が北米に渡った¹⁴⁾。

（2）海外渡航の実態

外務省外交史料館蔵の「海外旅券下付（付与）返納表進達一件」によれば1868～1908（明治初～明治41）年の間における地域別旅券下付状況は表1のようであり、アメリカ・ハワイ・朝鮮・清国をはじめ東南アジア、中南米諸国などに渡航した愛知県出身者は4,384名に達している。

明治期の愛知県における海外渡航者の出身地を見ると、地域的な偏在が認

められ海東郡・海西郡・中島郡・名古屋市・知多郡・碧海郡などが多出地域となっている。とりわけ海東郡・海西郡（現海部・津島地域）が多く、さらに隣接する中島郡を含めると海外渡航者全体の43.9%で、明治期における海外渡航の中心は、尾張西部の農村部であった。

海部・津島地域の年次別旅券下付状況は表2の通りで、海部・津島地域における北米移民は、先ず山田芳男の出身地八開村において先鞭がつけられ、やがて近隣の佐織町・津島市・平和町・祖父江町などへ広がっていった。主な渡航先は表3のごとく、アメリカ、メキシコ、ハワイ、アジア諸国の順となっており、特にハワイを含めたアメリカへの渡航者は63.4%となり渡航者全体の3分の2を占めている。渡航状況についてみると、1899～1900年にかけて第一次ピークを迎え、アメリカ移民が大部分を占め、ついで1906～1907年にかけて第二次ピークを迎え、この時期の主な渡航先はメキシコ（同時期における海外渡航の83%）となっている。渡航目的は表4に見られるごとく、海外渡航者全体の80%が出稼ぎ移民であった。

メキシコへの渡航者は、移民会社の斡旋によりメキシコ国内の炭鉱や鉄道工事現場などでの出稼ぎを目的とした移民であり、アメリカにおいて日本人排斥運動が激しくなった1906年から急増した。しかし、メキシコに渡った移民のほとんどは、メキシコ国内での労働に就業することなくアメリカに入国していった。いわゆる「メキシコ廻り」のアメリカ移民であった⁵⁾。

（3）移民の急増と地域経済に及ぼす影響

移民の急増は地域経済に様々な影響をもたらした。当時の新聞『新愛知』（中日新聞の前身）によれば、北米移民の状況とその影響について「米国渡航者と地主の恐慌」と題して

「近來尾張津島地方より米国へ渡航するもの非常に多き由なるが今其理由を聞くに或るものは一兩年間渡航して千円を持ち帰り或る人は五百円を貯蓄したりとの噂同地方に喧伝せられ労働者は内地にありて僅か一日廿五銭や三十銭に狹狭とし農家にては一カ年耕作して地主に年貢を納め清算したらんには僅々の利益なれば寧ろ海外に渡航して巨利を得るに如かずとの意より渡航の念を起し既に去

る二日にも一時に三〇余名出発し藤浪村大字見越の如きは渡米者一戸平均一人半余に当たれり尚出願渡航準備中の者少なからず是れ等は多く農業に従事しありし者なるが一朝渡航する時は同時に農業を中止するを以て自然余裕地を生じ従来相争って小作人たらんと望みし習慣も昨今は却って反対の傾向となれり若し昨今の渡航者にして前渡航者の如く千円も持ち来たり好結果あらんには今後一層増加するは必定にしてかかる場合には肥田沃野も耕耘の人なく為に茫漠たる草田原野と変すべしとて地主は大いに杞憂しつつありと云ふ。」

と報じており⁽⁶⁾、農村部における移民の急増は、農業労働力の減少を招き、地主にとって深刻な問題になりつつあった。

海部郡内でも、とりわけ移民多出地域である旧草場村（現佐織町）では、戸主や長男が多数移民しており、また村内における課税等級において、中流以上の戸の出身者が多数を占めている⁽⁷⁾。

同地域は藍の栽培や佐織縞の生産に従事していた家が多く、それまで地域経済を中心的に担ってきた上層・中層の人々が将来への展望を失い、手っ取り早く収入を得る適当な手段として移民を選んだものと考えられる。

移民者から郷里への送金は、地域経済を大いに潤した。藤浪村（現佐織町）では1903年において、アメリカ移民者111名からの送金45,000円が見込まれており⁽⁸⁾、1人当たりにすると400円をこえる金額である。当時、米1俵の値段が4円36銭、農業労働の賃金が男で1日40銭の時代に400円は普通には手にすることのできない大金であった。

草場村（現佐織町）の戸数割課税等級（25等級に分かれている）について、1889年から1906年の推移を見てみると、5等級以上の上昇が17軒あり、このうち11軒がアメリカ移民を出している家で、これは仕送り資金によるところが大きいと考えられる⁽⁹⁾。

アメリカ移民は、地主階層にあっては労働力の流出による年貢収入の減少や農地の荒廃をもたらすこととなったが、一方で移民先より郷里に送金される大金により地域経済が潤うこととなった。八開村や佐織町などでは、大金を手にした故郷に錦を飾り、家屋の新築や土地の購入あるいは事業を起こした人が多数いる。

また、移民して彼の地に定住した人たちは、異国の地で額に汗しながらも故郷

のことを忘れなかった。むしろ、異国にいるからこそ望郷の念は人一倍強いものがあつた。移民した人々は、郷里の肉親への送金は言うに及ばず、神社・仏閣への寄進も盛んにおこなっている¹⁰⁰。

3. 出移民の要因

(1) 移民先駆者の存在と呼び寄せ

山田芳男は、ハリマンの経営するナトマのブドウ園やサンフランシスコ対岸オークランドのワイン工場で、日本人労働者の監督として働き、また愛知県からの移民を世話した。1892年にはサクラメントで日本人相手の旅館経営を始めている。当時日本人が経営する旅館では職業の斡旋も行っており、愛知県出身者の多くは山田の世話により、サクラメント平原一帯で職を得て農業労働に従事した。山田の恩顧を受けた海部・津島地域出身の移民者は、その数260余名にのぼっている。

呼び寄せによる移民ブームの契機について『北米愛知県人誌』は、「この年（明治二十三年）一月、昨冬十月故国を出発したる鬼頭以下（山田芳男に引率された北米移民者十一名）より、無事に太平洋五千裡を踏破して米国桑港に上陸したりとの報道郷里に達す。郷黨は彼等一行が無事に目的地に達したるを歡喜すると同時に、一行が各自その父兄に宛てて詳細に認めたる私信に依りて、山田の帰国中に物語れる加州の産業、労働界の大勢、米国人の生活状況等の詐りなきを確かめ得たと同時に、当時ナトマのブドウ園に於ける労働賃金が日給壹弗二十五仙といふ高価なるに喫驚し、続いて二三月頃二三者より若干の送金ありしに及んで初めて米国労働界の有望なるを確認し、茲に第二遠征隊の続発を見るに至れり」¹⁰¹と記している。

山田による移民勧誘、移民者からの呼び寄せと郷里への送金などにより移民ブームが起こり、1891年～1900年の10年間に、海部・津島地域からアメリカに渡航した者は579名にのぼり、そのほとんどが出稼ぎを目的とした移民であつた。

(2) 自然災害

1896年8月下旬に発生した集中豪雨は、中小河川の氾濫をもたらし、海東郡に

おける浸水家屋は9000戸近くにのぼる大惨事となった。この惨状について、当時の『扶桑新聞』は、「尾張海東海西両郡水災被害地の人民は渾て衣食住に窮しつつあるが、殊に農家は田畑全く荒廃に帰し、今後一兩年間は到底収穫覚束なきのみならず、災後待ちありし破堤修繕工事は目下国庫の補助を申請中にて未だ工事に着手せず、為に農家は一つの執るべき業務なく、益々貧窮に陥るを以て、昨今他府県下へ出稼ぎに出づる者尠なからず」と報じている⁹³。

さらに翌1897年9月末の雨台風により、八開村鵜多須地内で佐屋川（木曾川の支流）の堤防が約90メートルにわたって決壊し、中島郡の一部および海東・海西の2郡（現海部郡）の過半は濁流の覆うところとなった。「鵜多須切れ」の名で知られるこの大水害は、八開村を始め海部・津島地域に甚大な被害をもたらした。

打ち続く自然災害で生活が困窮化し、京阪神や北海道、さらには海外へ移住する人もでてきた。当時の新聞『新愛知』によれば、「近来米国の農業に出稼ぎする者非常に多く、就中海東郡藤浪、川淵、草場、津島町等殊に盛んなり。今海東郡役所の調査に因るに三十一年二月より今年一月廿九日に至渡航者総計二百三十一人なり」とあり、さらに「海東郡における米国渡航者は郡役所の調査によれば昨年以來一昨（明治三十二年三月）六日まで三百廿二人、其中二月中の渡航者は九十五人あり」とあり⁹⁴、1899年2月には1カ月間で95人が渡米している。このように多発する自然災害によって生活基盤を失い、一攫千金を夢見て海外に移住していった者も少なくない。

(3) 地場産業の衰退

濃尾平野は豊かな穀倉地帯で、概して水田地帯が畑作地帯よりも多いが、海部郡内の八開村や佐織町では、水田よりも畑の方が多く⁹⁵、同地域では近世以来主要な換金作物として木綿の栽培が盛んで、16世紀末には「尾張の白木綿」が綿織物の銘柄品として知られていた⁹⁶。

また、1822年に樋口好古が著した『尾張徇行記』の二子村（現八開村二子）の頁には「丸島ニテハ多ク藍ヲ作レリ、此辺マツチニテヨク土地ニアヘリ」とあり、近世後期には八開村や佐織町において藍の栽培が盛んに行われ、藍や木綿を原材料にして、家内工業としての綿織物業が早くから発達していた。

18世紀中ごろに、佐折村（現佐織町）の一農民が佐織縞と呼ばれる綿織物の技法を開発し、18世紀後半には京都の西陣から棧留縞の技術がもたらされ、さらに19世紀初頭に結城縞の技術も伝わり、尾張を中心とする濃尾地方は全国有数の機業地帯へと発展した。

尾張の織物業は京都の西陣を凌ぐ勢いとなり、江戸後期の農学者大蔵永常は『広益国産考』の中で「棧留縞は昔京都西陣にて織りたるよしなれども、今は多く織る事なくして尾州より織出し諸国へ売出す事数百反と云ふべし」と記し、かなりの盛況であった。

明治政府は産業振興策の一環として海運業を保護し、1893年にはボンベイ航路を開設して、安価で良質のインド産の藍や綿花の輸入が始まった。インド産の藍は日本産の藍に比べて色素の含有量が多く、輸入の増加により藍栽培農家は大きな影響を受けた。さらに1880年ドイツのバイヤーが藍の色素であるイジノゴの化学合成に成功し、1904年から合成藍の輸入が急増して藍栽培農家は大打撃を受けた。

藍栽培の中心地である川淵村（現佐織町）についてみると、1897年における葉藍の作付け面積は400反に対し、1905年には皆無となっており¹⁰⁰、洋藍や化学染料の輸入、そして1900年以降の佐織縞の不振などにより地元産の藍の需要が激減して、農家は藍の栽培を中止せざるを得なくなった。

また、1890年代以降、紡績業における機械制生産が急増し手機織は衰退に向かった。機械紡績において日本の在来綿は不向きであった。在来綿は綿毛が10ミリ程度で、太く短くねじれが少ない。インド・アメリカなどから輸入される綿は、綿毛が30～40ミリで長く繊細で、機械紡績に適している。機械紡績の発達に伴い、輸入綿花の需要が増大して、綿花の栽培は衰退に向かい、愛知県でもとりわけ綿花栽培が盛んであった尾張地域の綿作農家に壊滅的打撃を与えた。

佐織縞の生産は、農家の家内工業的な色合いが強く、零細な生産者が多かった。結局、佐織縞は機械紡織に太刀打ちできず、また織物の幅が狭く染色が悪いことや、全体として粗製濫造に流れたことなどが相まって急速に衰退していった¹⁰¹。八開村や佐織町などでは、藍や綿などの商品作物の栽培や綿織物業といった地場産業が衰退する時期に北米移民が急増している。

以上に述べてきたように、海部・津島地域における移民多出の要因は、①移民先駆者の存在と移民者による呼び寄せ、②自然災害により生活基盤を失った人が多数だったこと、③地場産業の衰退や産業構造の変化に伴う余剰労働力の発生などで、様々な要因が複雑に関与しあって、移民を多く送り出すこととなった。

おわりに

移民ブームから早一世紀が過ぎ去ろうとしている。海外移民のことを知る人は少なくなってきた。また、アメリカの日系社会は三世・四世の代となり、日本語を理解できる日系人は少ない。郷里との関係も疎遠になりつつある。

移民した人たちは、日米関係の狭間で翻弄され、排日の嵐に遭い、ときには日本人・日系人であるが故に、犯罪者のごとく隔離収容されるという痛ましい幾多の辛酸をなめてきた。彼らの歩んだ道のりを明らかにし、それを記録することは急を要する。

本稿は、紙幅の関係で海部・津島地域の出移民の実態と移民の要因分析に留めた。移民の展開や愛知県人会など日系コミュニティの形成については別の機会に譲ることとする。

表1 明治期愛知県出身者の旅券下付状況

	1868～1908年の合計
海東郡	1 0 9 2
海西郡	3 3 4
中島郡	4 9 7
名古屋市	7 9 6
愛知郡	1 3 9
春日井郡	1 6 0
丹羽郡	7 6
知多郡	3 4 1
幡豆郡	7 4
碧海郡	2 0 8
額田郡	5 9
宝飯郡	6 0
渥美郡	1 3 9
その他	4 0 9
合 計	4 3 8 4

外務省外交史料館所蔵「海外旅券下付
(付与)返納表進達一件」より作成

表2 海部・津島地域における旅券下付状況
1868(明治元)年～1908(明治41)年

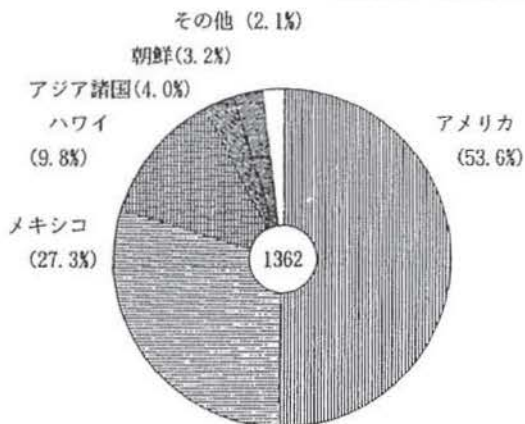
	大 治	蟹 江	佐 織	佐 屋	七 宝	甚 目 寺	十 四 山	立 田	津 島	飛 島	八 開	美 和	弥 富	合 計
1868～				1										1
1888 (M21)														
1889 (M22)														
1890 (M23)				1							4			5
1891 (M24)			3						1	17				21
1892 (M25)			4	2						1				7
1893 (M26)			34					2	1	8				45
1894 (M27)			41	3			1	2	9	1	24			81
1895 (M28)										1				1
1896 (M29)			6		1		1		1					9
1897 (M30)			13		1			2	7		4			27
1898 (M31)	1		26	2	7	2		3	4			1		46
1899 (M32)		1	80	5				9	21		18			134
1900 (M33)	2		93	32	1	2	2	10	64		24	12	1	243
1901 (M34)		1	1	3	13			1	3		8		1	31
1902 (M35)	2		1	1	6				4		3			20
1903 (M36)		2	31	12	1		1	1	22		9	1	1	81
1904 (M37)			23	4	8			1	19		7	16	7	85
1905 (M38)	1		16	4	9			1	8	1	2	4	3	49
1906 (M39)	4	5	66	31	48	3		28	39	4	26	31	26	311
1907 (M40)	4	7	19	13	27	1	3	5	24	1	15	5	14	138
1908 (M41)	1	4	3		8			1	2	1	1		2	27
合 計	15	20	460	114	130	8	8	66	229	8	172	73	59	1362

出典 表1参照

*横浜開港場で旅券を下付された者のうち、「海外旅券下付(付与)返納表進達一件」に記載されていない者もあり、実際にはもう少し増えるものと思われる。

表3 海部・津島出身者のおもな海外渡航先

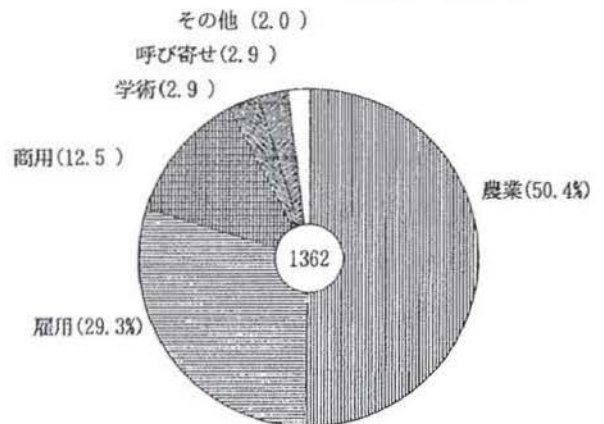
1868(M1)～1908(M41)



出典 表1参照

表4 海部・津島出身者のおもな渡航目的

1868(M1)～1908(M41)



出典 表1参照

注

- (1) 移民研究の動向は、移民研究会編『日本の移民研究』(1992)に詳しい。
- (2) 北米移民を多く送りだした海部・津島地域において、移民関係の記述が掲載されている自治体史として、『七宝町史』(1976)・『佐織町史』通史編(1989)・『八開村史』通史編別冊(2000)がある。『八開村史』においては、筆者が八開村を中心に海外移民に関する調査研究を行い、「愛知の北米移民」と題して出筆した。また、報告書として、拙著「近代アメリカ移民—丸島コロンブスと愛知アメリカ移民について—」(愛知県教育振興会『教育愛知』第40巻第11号、1993)、羽澄英治「愛知のアメリカ移民」(『雑景日本・アメリカ』1997)、石田泰弘「統計から見た愛知県における海外渡航の様相」(名古屋郷土文化会『郷土文化』第53巻3号、1999)等があるにすぎない。
- (3) 北米愛知県人会編『北米愛知県人誌』(1920)P.185
- (4) 八開村史編さん委員会編『八開村史』通史編別冊P.219
- (5) メキシコ移民に関しては、エンリーケ・コルテス『近代メキシコ日本関係史』(1988)が詳しく、また、海部・津島地域からのメキシコ廻りのアメリカ移民については、前掲『八開村史』通史編別冊P.286以下に詳しい。
- (6) 『新愛知』明治33(1900)年3月6日付
- (7) 佐織町史編さん委員会編『佐織町史』通史編P.207
- (8) 佐織町史編さん委員会編『佐織町史』資料編二P.678
- (9) 前掲『佐織町史』通史編P.227
- (10) 1927年、海部・津島出身の北米移民者255名が昭和天皇即位の御大典を記念して津島市に鎮座する津島神社の南大鳥居を寄付したのをはじめとして、郷里の神社・仏閣への寄進は現在確認できているものだけで17カ所に及んでいる。
- (11) 前掲『北米愛知県人誌』P.188～189
- (12) 『扶桑新聞』明治29(1896)年11月6日付
- (13) 『新愛知』明治32(1899)年2月2日付、及び同年3月8日付
- (14) 前掲『八開村史』民俗編P.24、前掲『佐織町史』資料編二P.535～560
- (15) 武部善人『綿と木綿の歴史』(1989)P.100
- (16) 前掲『佐織町史』通史編P.207
- (17) 『扶桑新聞』明治29(1896)年8月27日付によれば、「海東西郡・中島三郡の機業者凡そ五〇〇戸より産出する佐織木綿は昨今不振。経済社会の大変動、金融の逼迫、木綿輸出も盛時の半時になる」と佐織木綿の不振を報じている。

(つつい ただし 文化人類学)